

3月の行事報告 March

宿縁廟法要・彼岸会法要 平成31年3月21日(春分の日) 13時～

◆がんを「引き受ける」という選択

去る3月21日、中原寺の宿縁廟法要・彼岸会法要があり、大分県佐藤第二病院院長で元龍谷大学大学院教授の田畑正久先生のご法話「往生浄土、正定聚」を聴聞しました。

その午前中に、田畑先生を囲む門徒有志の法座があり、その席で「がん体験」を発表しました。

田畑先生とのご縁は、私が昨年(2018年)、会頭を務めた第35回日本東方医学会のシンポジウム「クオリティ・オブ・デス(安らかな死)をめざす東方医療」に、シンポジストとしてご登壇いただき、「グッド・デス(よき死)」のお話を伺いました。

このときは、私自身がんが見つかるとは夢にも思いませんでした。ところが、半年後、昨年8月の検査入院で膀胱がんと診断され、翌9月、再び入院して膀胱がんの摘出手術を受けました。

がんが粘膜下まで浸潤していれば、膀胱の全摘出もあり得ると言われ、一時は「死ぬ」という二文字が頭をよぎりました。

その後、約2カ月間、膀胱内にBCG(ウシ型結核菌)を注入する免疫療法を受けましたが、こし3月の内視鏡検査で「新たな病変(がん細胞)は見られない」と診断され、現在は毎月一回の通院による経過観察中です。



今回のがん検査・手術の前後に、不思議なことが二つ、起こりました。

一つは、8月の検査入院のあと、日経新聞で読んだ南木圭士(医師で作家)さんのエッセイ「天狗岳へ」の中に、ハッとさせられる「気づき」があったことです。

それは、「真の決断とは、あれこれ状況判断するのではなく、状況そのものを引き受けること」、「淡々と状況を引き受けていたら、そちらのほうが変わってくれたのだ」、「諦(あきら)めるの語源は事態を明らかに見て取ること。

言葉を介すると心身が鎮まる」という言葉でした。そうか、いまの私にとって「真の決断」とは、あれこれ状況判断するのではなく、いま、がんである私、という状況そのものを引き受けることという言葉が、心の深いところで静かに響きました。

もう一つは、9月のがん手術後、田畑先生から届いたメール(「浄土真宗の救い」)です。

たとえば、がんという病気のような、抗いようのない出来事としての「苦」から逃げる、または「苦」を退散させてくれる救いの手を求めるような信心ではなく、「理不尽としか言いようのない現実を、ありのままに受け入れること」、「在りのままの現実を受け入れて、念仏申す」と書かれていました。

半年前のシンポジウムで田畑先生が話された「仏教が教える生き方は、今を精いっぱい完全燃焼して生き切って、あとはお任せするという形で、仏さんがいいようにしてくれる」の言葉が、そのとき初めて、スッと心に入りました。

(原山 建郎 記)

加藤 辨三郎 師の言葉

仏教では日常の実践として布施を説く。財施、法施、無畏施などむつかしいことも説いているが、そんなのばかりではない。わかりやすいのに無財の七施というのがある。こうだ。

- 1 やさしい目を ほどこす。
- 2 やさしい顔を ほどこす。
- 3 やさしい言葉を ほどこす。
- 4 あたたかい心を ほどこす。
- 5 労働を ほどこす。
- 6 座席を ほどこす。
- 7 宿を ほどこす。

これなら今でもりっぱに通じよう。だが、これを実際に行なう人がどれだけあるだろうか。

「座席をほどこす」ひとつでもなかなか容易でない。ひとごとではない。

私自身にとって、まことに耳の痛い話だ。それもさることながら「労働をほどこす」は特に味が深いではないか。「労働をさせていただきます」、その精神は貴重である。

何よりも強調したいのは、これが覚りへの道であることだ。覚りはよろこびである。

最も深く、最も浄きよろこびである。その境地にある人にとっては、労働が遊技のごとく楽しいにちがいない。

感話 シリーズ-27

【東京教区仏壯一泊研修会に出席して】

平成31年2月17日(日)・18日(月)



東京教区仏壯一泊研修会が山梨県石和温泉で開催され、中原寺から石井会長をはじめ4名で参加いたしました。

風は冷たいながらも陽だまりに春に近いことを感じる好天でした。会場には関東一円から300人余りの門徒が参加して2日間の研修会が行われました。

一日目は午後からの開催で、大阪の正満寺の安方哲爾住職による「しあわせ・苦」についての講話がありました。その中で、歳をとるにつれて人は孤独になっていき、自分がそれまでに築いて来たものがとられていく気持ちになる。

何故、自分一人がこのような悲しみに合わなければならないのかと嘆き悩むことになる。それは、その人が今まで周りの人たちを見て来なかった、分かっていたからで、大なり小なり同じ悲しみ、苦しみに悩んでいる周りの人たちに気づいていなかったのだ。

人に相談できる悩みは中くらい。本当につらい悩みは人に相談できないものだ。語らずにわかってくれるのが仏様、南無阿弥陀仏はお釈迦様そのものだ。というお話でした。

2日目は、最初に明西寺、誓願寺、光源寺からそれぞれ壮年会の活動状況の報告がありました。その後、昨日に引き続き安方師の講話があり、孤独はつらいが阿弥陀様がおられること、光り輝くものもいずれは色あせていくこと、娑婆は「かんにん」が必要なこと。などの話があり、最後に、「南無阿弥陀仏を唱えれば、この世の利益きわもなし」と結ばれました。

合掌 (太田 清史 記)

